第6回新市将来構想策定小委員会

議　事　録

第6回新市将来構想策定小委員会会議録

1　会議を開催した日時及び場所

・日　　時　　平成１５年6月２５日（水）　　午後6時３０分
・場　　所　　長岡市役所大会議室

2　会議出席委員の氏名

豊口　　協	二澤　和夫	山本　俊一	外山　康男
佐々木保男	熊倉　幸男	米持　昭次	坂牧宇一郎
朝日　由香	村上　雅紀	北村　　公	池田　守明
小池　　進	高野　徳義	野田　幹男	

以上　１５名

（欠席委員の氏名）

長谷川　孝　　石黒　貞夫

以上　　2名

3　議題及び議事の要旨

別紙のとおり

長岡地域任意合併協議会新市将来構想策定小委員会

◎事務局（北谷）

ただいまより長岡地域任意合併協議会第６回新市将来構想策定小委員会を開催させていただきます。

なお、本日の小委員会は、石黒委員及び長谷川委員がご都合により欠席となっておりますが、半数以上の委員のご出席をいただいておりますので、小委員会規程により会議が成立していることをご報告申し上げます。

次に、本日の議事に係る資料のご確認をいただきたいと思います。本日の会議資料として、会議次第、資料１を配付させていただきました。なお、会議次第、資料１につきましては事前に送付させていただいておりますが、資料１についてはイラスト等を入れ、工夫したものを用意いたしましたので、恐れ入りますが、本日お配りしているものと差し替えをお願いいたします。

それでは、お手元の次第に従いまして順次進めさせていただきたいと思います。なお、恐れ入りますが、ご発言の際はお近くのマイクを使われますようお願いいたします。

それでは、議題に入ります。この後の進行につきましては、豊口委員長よりお願いいたします。

◎委員長（豊口　協）

それでは、ただいまから第６回の小委員会を開かせていただきます。

議題に従いまして進めてまいりたいと思いますが、最初に議事次第の新市地域らしさ価値についてということで、事務局の方からご説明をひとつお願いしたいと思います。

◎事務局（竹見）

事務局の竹見と申します。私から説明をさせていただきます。恐縮ですが、座って説明させていただきます。

皆さん、資料ナンバー１の新市地域らしさ価値（案）、ブランディング価値検討資料をごらんください。

１枚おめくりください。こちらは、地域らしさ価値の具体化方針ということで、今までの各種調査結果とか、それから小委員会で検討されたことをイメージとしてまとめております。上の具体化イメージということで、一番左側につきましては各種調査結果、これはまちづくりワークショップ、それから地域アンケート、それから有識者ヒアリングや首長・議会代表ヒアリングというものを調査結果としてまとめたということで、前回「地域らしさ価値」をキーワードとして皆様方にご紹介して、いろいろそのキーワードについてご討議をいただきました。今日は、右の重点となる「地域らしさ価値」の具体化方針と、それから新市地域らしさ価値の具体化について今回ご討議をいただくということです。これが前回までの討議内容を簡単にイメージとしてあらわしたものです。

下の方にいきますと、こちらが上のイメージを具体化したものです。一番左側の地域らしさ価値キー

ワードということで、前回今までの調査結果をまとめたものを５分野にキーワードとしてまとめております。新市イメージに関するビジョンのキーワード、それから生活ハード、産業振興とか都市基盤です。それから、生活ソフト、ソフトの行政運営です。それから、新市マインド、人間像とかに関するビジョンのキーワード。それから、地域資源活用に関するビジョンのキーワードと、これを皆様方にご紹介していろんなご意見をいただきました。

真ん中のところですけど、小委員会のご発言を中心にまとめたものです。こちらにＷＡＮＴ、期待・希望・ありたい姿ということでまとめております。上から申し上げますと、人口増加とか、産業振興と雇用の確保、それから農業の活性化、それから新産業とか新事業の創出とか、育児・医療・福祉の充実等いろいろご討議いただいたものをまとめました。特に日本一子育てのしやすいまちにとか、働きやすいまちに、それから人口を増加させたいとか、今後高齢者をどういうふうにして活かしていくかとか、交流人口を増やしたいとか、それでいろんなご意見をいただいたものをご紹介をしたものです。

それから、一番下のＣＡＮ、現状の強みということで書いてございますが、今までの調査を再度取りまとめております。

これらの今までの新市らしさ価値のキーワード、それから小委員会のご発言の中心になったもの、それから現状の強みを取りまとめたものが、真ん中にありますＷＩＬＬということで、実現すべき事柄七つにまとめております。まず、上から申し上げますと、産学（産学官）協働による産業振興・新産業の創出、それから基盤整備を活かした新しい農業の位置づけと活性化、「すみやすさ」の実現。それから、四角がちょっと消えていますけども、四角を入れてください。育児・安全・予防医療・福祉・住環境の充実、それから自然・文化・歴史の尊重と活用、内外の交流人口の拡大、若者を始めとする人口の増加、これを新市の地域らしさ価値として、新長岡の特色あるもの四つにまとめております。これが一番右のオレンジ色で囲ってある「地域らしさ価値」具体化方針というものでございます。

まず、１番が、これは産業に関するものです。技が育む先端産業の地であること、それから高付加価値製造業の集積地であること。次が、農業のことにまとめております。体をつくる優れた「食」産地であり続けることです。３番につきましては、主に高齢者、それから子供のことです。子育てのことを中心に、生活のことについてまとめております。知をつくる人材育成と高福祉・教育環境などによる「住みやすい」地域であること。それから４番です。こちらは、交流のことをまとめております。自然・歴史・文化を活かした交流の地域となることということで、こちらは左の真ん中のＷＩＬＬの実現すべき事柄をまとめております。

これらの四つの事柄を新市の地域らしさ価値として検討したものが、２ページ以降四つにまとめております。

それでは、ご説明をします。２ページ目をごらんください。新市地域らしさ価値その１と書いてございます。こちらは、「地域らしさ価値」具体化方針の１番の技が育む先端産業の地であること、高付加価値製造業の集積地であること、これについてまとめております。

まず、上の具体化方針に基づく調査結果の整理なんですけど、これは具体化方針の１をもう一度今までの調査したもので再度具体化方針の視点に基づいて取りまとめてあるものです。例えば期待・希望・ありたい姿としてこちらに書いてございますけれども、新潟県の中心になりたい「ものづくり」による産業振興をめざす、あるいは新しい産業の創出、それからチャレンジ精神のある地域パーソナリティ、こういったものを将来ありたい姿として求められているということです。

それから、右下のＣＡＮということで、現状の強みということでまとめております。こちらは、交通至便・技術の蓄積が誇りである。それから、教育的環境とか、人材が育つ風土があるとか、そういったものを考えて、ＷＩＬＬというものが導き出されます。これが実現すべき事柄ということで幾つもまとめております。主なものをご紹介いたしますと、産学官が連携した新高度技術産業づくり、それから地下資源の有効な活用、それから製造業をきっかけに全産業への振興をめざす。それから、伝統と実績を広くアピール、技をたかめるというこういった実現すべき事柄が数多くあらわれてくるということです。

こういった実現すべき事柄、ＷＩＬＬと、次の背景と環境という部分、例えば中国を初めとする国際競争の中で、高付加価値化・産業高次元化への取り組みは不可避であるとか、それから自然に恵まれ、豊かな感性と創造力を持つ人材（長岡地域の人材育成実績結果）が、新世紀の「起業人の条件」であるとか、そういったものをかけ合わせまして実現すべき事柄をこれからまとめて、確立すべき新市地域らしさ価値に仕上げていきました。

その仕上げたものが下の四角で囲ってあるところです。読み上げますと、楕円の下の部分、これが確立すべき新市地域らしさ価値の一つとして考えられるものです。これが地域らしさ価値の意味をあらわしています。読み上げます。長岡地域の先鋭性を持った産業（高付加価値電子機械製造業、ファッション産業、食料品製造業、醸造業）は、「粘り強さ」「思慮深さ」の人間性と「起業の精神」や「人材」を育む伝統的な精神風土に由来する、たゆまむ努力と果敢な挑戦の「技」から生まれている。この長岡地域らしさをさらに発展・推進し、価値創造型の産業地形成を図ることで、地域の自信と安定を獲得する。これが一つ目の確立すべき新市地域らしさ価値の意味でございます。

これを、意味や、それから行動から一言で長岡らしさ価値をあらわしたものが、上の楕円のオレンジ色で書いてある言葉です。これが独創企業生育都市ということで、一言であらわしております。下の部分は、人間という立場から見たときにどういうふうに表現されるかということをあらわしたものです。

いわゆる長岡地域の誠実さということを前面に出しますと、誠実さが生み出す「技」立国・ながおかということで、一言であらわされるということになります。

それから、赤の下の３行の言葉でまとめてありますけど、こちらは新市地域らしさ価値を高めるための姿勢や新市の行動です。新市のブランディング価値を高めるための姿勢、行動をあらわしております。

読み上げます。伝統と実績に基づく、分野や規模に寄らない「価値創造型の産業地」としての長岡地域を推進・発信する。風土や自然環境と一体化・共存化する新産業のまちづくりの姿勢を明らかにする。新たな価値創造を促す「企業精神」と人材の育成を、新市地域一体で推進するということです。これを

言いかえますと、独創企業生育都市というのはこういうことを行っていく都市だということでお考えいただければよろしいかと思います。

次に、３ページをごらんください。こちらは、新市地域らしさ価値その２ということでまとめております。こちらは、「地域らしさ価値」具体化方針の２番、体をつくる優れた「食」産地であり続けること、これを基盤に今までの調査結果を取りまとめております。

まず、期待・希望・ありたい姿です。農産物の産直直売・食品加工開発をめざすとか、それからブランド食・観光・交流拡大というものを主に挙げられております。

それから、現状の強みは、先進的な農業基盤・優れた産物、それから豊かな自然と都市基盤とか、水や土地とともにひとが育む、こういったものを現状の強みと。

それから、ありたい姿から導き出されます実現すべき事柄がＷＩＬＬということでまとめてあります。

主なものを紹介しますと、「食」をキーワードとした地域（地産地消の推進）の活性化、それとかこだわりと誇りのある農業がまちの活気の糧をつくるまち、元気そしておおらか、伝統と実績を広くアピール、そういった実現すべき事柄が出てまいりました。それから、農業とか米を取り巻く環境ですけども、食の購買心理というのは、味に加えて安心安全さが関心事であるとか、それから日本の穀物需給率は30％弱というようなことが背景とか環境として挙げられています。

そして、確立すべき新市地域らしさを求めるにあたって実現すべき事柄、ＷＩＬＬと、それから背景・環境を考えて仕上げますと、こちらの下の方に書いてありますような意味になります。読み上げます。

安全でおいしい米や野菜は、自然と調和した長岡地域の人々の誠実な営みの産物である。米に象徴される長岡の農産物（＝食材）は、日本人の食を支え、活動の源となってきた。これらを生み出す自然と人間の大いなるエネルギー（棚田の原風景や各種伝統芸能・祭りなども含まれる）は、生産という分野に留まらず、農産物から地域文化をふまえた観光や交流へと波及し、日本人を元気にする可能性を持っているという意味になります。この意味を一言であらわしたものが上の言葉です。元気に満ちた米産地。それから、長岡地域の人たちの観点から言葉を言いかえますと、ひたむき米の生まれる里・ながおかということでまとめました。

これらを今後新市になったときに行動すべきこととか姿勢としてあらわしたものが、赤く囲った下の三つのことです。読み上げます。「米＝主食＝元気の源」として、新市を「日本を元気にする活力の発信地」として位置づける。それから、「米＝日本の文化」として、新市が自然・文化・心を尊重した地域づくりの姿勢を明らかにする。環境や文化的側面まで一体化した施策推進により、米の付加価値を高め、新市産出米の競争力を強化する。こういう行動と姿勢が生まれてまいります。今ご紹介したものが地域らしさ価値のその２です。

次、４ページをごらんください。新市地域らしさ価値その３です。こちらの具体化方針は、３番の知をつくる人材育成と高福祉・教育環境などによる「住みやすい」地域であることです。具体化方針に基づきまして、今までの調査をまとめたのが、上の期待とか希望、それから実現すべき事柄とかの形でま

とめております。

期待とか希望、ありたい姿でございますけれども、まず高福祉のまち、それから豊富な資源を活かしたフィールドミュージアムづくり、それから老人が元気になるまちということで主に挙げられています。

それから、現状の強みを紹介します。豊かな自然と都市基盤、それから協調性があり、人情に厚い地域パーソナリティー、地域の個性です。それから、元気な高齢者・優れた人材ということが現状の強みとしてあると。

この現状の強みとありたい姿を考えて、実現すべき事柄を導き出しております。主なものを紹介します。楽しく期待をもって子育てができるまち、老若が協働するまちづくり、安心・安全に住めるまち、美しい河川、森林を次世代に残す、豊かな自然の保全と積極的な活用、身近なコミュニティ拠点の整備ということが出てまいります。

それから、こういったことの背景と環境の中には、急速な高齢化の中での老人福祉の重要性の増大、少子化の中での出産・子育て支援の重要性の増大、次世代を担う育児・教育への関心の高まり等が挙げられます。

実現すべき事柄と、こちらの背景・環境を新市地域らしさ価値に仕上げたものが下の言葉になってまいります。読み上げます。高速交通網の整備により首都圏へは至近な時間距離にありながら、信濃川の水系と東山、西山の産地で構成される長岡地域は、利便性、機能性と同時に水や緑の資源豊富な健全な生活環境を信条としている。この生活環境と同時に「人材育成の環境」と実績から、高齢者や子供などの世代をつなぐ人々にとっての「住みやすさ」「育ちやすさ」を志向することによって、安定と安らぎ住まい都市を発信する。新市地域らしさ価値としてこういう意味があります。

これを一言であらわしたものが上の言葉です。読み上げます。世代がつながる安住都市。それから、人間の視点の言葉で言いかえますと、未来人を育むフィールドミュージアム・ながおかという一言であらわすことを考えました。

こちらの地域らしさ価値を今後新市として行動、あるいは姿勢として示すものが、一番下の赤で囲った部分です。読み上げます。行政・市民が一体となって子育て支援や高齢者福祉を推進し、「住みやすさの代表地域」としての新市を発信する。それから、生活の背景となる川や森林を守り育てることで「住みやすさ」の恒久化を図る、こういうことでまとめてみました。

次、５ページをごらんください。こちらが新市地域らしさ価値その４です。具体化方針の自然・歴史・文化を生かした交流の地域となること、主に交流というもので考えてみました。

まず、今までの調査結果をまとめたものを紹介いたします。ＷＡＮＴという部分で、期待・希望・ありたい姿の主なものを紹介します。滞在型の観光資源、それからそれぞれの文化を結びつけてより大きな価値を生む。それから、観光資源として全国発信、そういったありたい姿があります。

それから、現状の強みでございますけれども、多様な産業と郷土文化がいきづく、個性的な地域、人と自然が共生してきた歴史、それからそれぞれの地域文化資源というものが主に挙げられています。

これらの現状の強みとありたい姿から導き出されます実現すべき事柄が、ＷＩＬＬという部分で書いてあります。主なものを紹介します。誠実な率直性と確かさ、それから癒しのまち、それから交通網の再構築、「食」をキーワードとした地域の活性化、グローバルな中に、伝統的な教えも大切にするまち、伝統と実績を広くアピール。背景と環境でございますけれども、これらを取り巻く環境としまして、主なものとして日本文化のアイデンティティへの関心の高まり、それから滞在型観光の構成、ありのままの自然・文化の評価の高まり、それから将来的な環日本海交流の拡大というものが挙げられます。

これらの実現すべき事柄と背景・環境を新市地域らしさ価値に仕上げましたものが下の言葉です。読み上げたいと思います。長岡地域は古くから交通の要衝として栄え、様々な人々や物資が行き交った地である。長岡には、他地域との交流と融合の歴史がある。豊かな自然を背景にした各地の文化は独自性があり、日本各地、世界の人々とつながる受信力と発進力を内包している。一方で長岡は戦火に遭いながらも、人の営みによってつながれてきた心の歴史都市である。長岡が志向する交流とは単なる活況ではなく、精神文化や人間性が生み出す落ちつきや温かさのある和らぎの交流である。これが新市地域らしさ価値の意味です。

これを一言でまとめたものが上の言葉です。読み上げます。世界をつなげる和らぎ交流都市。また、人の視点で言いかえますと、人「ものがたり」競和国・ながおかという言葉で言いかえることができます。

これらの新市地域らしさ価値の行動や姿勢としてまとめたものが、下の赤でくくった部分です。読み上げます。新市各地の「技」や「食」「人」を地域資源として活用・連携し、日本・世界の人や文化が交流するまちを推進する。新市各地が、持ち味の競演を行なうことで、より高水準の交流地域を目指す姿勢を明らかにする。これが新市地域らしさ価値のその４です。

今ご紹介しましたものは、策定小委員会が始まって以来いろんな調査を行ってまいりました。冒頭申し上げましたように、まちづくりワークショップ、それから地域アンケート、それから有識者ヒアリング、それから首長ヒアリング、議会代表ヒアリング、そういった各種調査の結果やそういったものに、地域の皆様方の思いとか、こうなりたいとか、こうあるべきだとか、そういったものをまとめてきました。そういったまとめたものをいろいろ皆様方から前回いろんなご意見をいただいてまとめて、そして四つの具体化方針に整理しまして、それを今までの調査を具体化方針の視点に基づきましてまた再度整備しまして、それから今の世の中の背景とか、環境とか、今後どうなるかといったものから最終的に新市地域らしさ価値を仕上げてきたものです。新市地域らしさ価値については、この４本の柱ということで取りまとめてみました。こちらの新市地域らしさ価値でございますけれども、例えば合併した場合、一つの新市になった場合、30万人の人たちが共有すべき共通の価値であるということが言えます。

最後、６ページでありますけれども、６ページをごらんください。今、新市になった場合、４本の柱ということで新市地域らしさ価値をご説明をさせていただきました。この４本の柱を新市地域らしさ価値として、展開例としてどういうことが考えられるかというものをまとめたものが６ページに記載して

おります。

まず、展開例としましては、対外的展開と対内的展開に分けております。上の方が対外的展開として、市外の生活者や企業の方に今後どういうふうに重点的に考えていったらいいかということをまとめております。それは、総合地域イメージ訴求とか、それから地場産品ブランド活用、それから観光ブランド活用、その他の活用ということが考えられます。例えば「多様な産業」と「人間らしい暮らし」と「豊かな自然」が共存する新長岡、それから「米どころ・ながおか」の米や農産物は安全でおいしいというものを今後市外の、対外的に対して展開していくことが考えられるということです。

それから、下が対内的な展開の例です。これ合併した場合のことですけれども、こちらにつきましては地域アイデンティティ価値、それから暮らしの地域価値、それから福祉・教育・医療、それから働く場としての価値、こういったもので、展開の例として挙げております。その中で主なものを紹介しますと、自然と歴史・地域文化に恵まれ、人間らしい暮らしができる街、それから「働く場」と「豊かな自然」が共存し、住環境が整備されている新長岡。それから、働く場としての価値ですが、これが前回の小委員会でも非常に多くのご意見をいただきましたけども、元気な農業・工業・新産業がある働きやすい街にしていくと、そういった対外的展開や、それから対内的展開ということが考えられてくるということになります。

以上、簡単でございますけれども、新市地域らしさ価値を策定したまでの経緯と、それから内容についてご説明をさせていただきました。

◎委員長（豊口　協）

どうもありがとうございました。

過去５回にわたりまして、いろいろな形で意見交換をしていただきました。今事務局から説明をいただきましたように、ワークショップからの発表、これもすばらしい市民の声として一つの方向性が打ち出されたと思いますし、アンケート調査の結果、これも非常に前向きな、積極的なご意見をたくさんいただいてまいりました。特にまたヒアリングにつきましても、県外にお住まいの方々からも非常に適切なアドバイスを随分いただいたと思います。その都度その内容について小委員会等でご意見交換をしてまいりましたけども、今回こういう形で一つの方向性を打ち出していただきました。これですべて完全にできたというわけではございませんので、さらにこれを一つのたたき台としてご意見をいただきながら次のステップに入っていくということになろうかと思います。

ちょっとページを戻っていただきましてご意見をいただきたいと思うんですが、１ページでございます。１ページに、具体的な具体化への方針として今までの内容について整理をしていただいております。

この全体像をもう一度頭の中で整理をしていただきまして、長岡地域の持つイメージとの整合性がこれでとれているかどうかというふうなこと、またすべての住民にとってわかりやすく整理されているかどうかということ、それから特に地域らしさや将来に向けての行動として原動力となるようなキーワードがこの中にちゃんと整理されて入っているかどうか、既にこれは事前に資料はお配りしてございます

ので、そういう形でご検討いただいたと思いますけれども、１ページのところで特に気になられたことがありましたらご意見をいただきたいと思います。今日は自由に、肩のあれをおろしていただいてご発言をいただければと思いますが。

◎事務局（北谷）

委員長、補足させてください。

◎委員長（豊口　協）

はい。

◎事務局（北谷）

今日のこの会議で皆様方にご意見を賜りたいのは、今委員長からご発言ありましたけれども、これで長岡のイメージでわかりやすいのかとか、キーワードが抜けているんじゃないかとか、市民にとってわかりやすいかどうか、そういう地域らしさ価値その１からその４までありますが、これについてご議論をいただくわけですけども、それとは別にご参考までに申し上げますが、最後のページ、６ページ目をごらんいただきたいんですけども、今まで事務局が説明させていただいたとおり、四つの柱があります。

これについて今日ご議論いただくんですが、この四つの柱から波線、あるいは実線で右の方に伸びていますが、例えば前回見附市の助役、あるいは長岡市の助役から発言にもありましたが、６ページ目の下の方、下から２段目、福祉・教育・医療の分野がありますが、ここで例えば寝たきりゼロとか、待機児童ゼロとか、そういったものをこの次に肉づけしていくというわけです。じゃ、その待機児童をゼロにするためにはどういう政策、どういう事業が展開できるのか、現実を踏まえて。そういったことを今後我々事務方が次回にはまた肉づけをしてお示しすると、そういう計画になっています。今日はこの四つの柱について、先ほど委員長がご発言いただきましたけども、今日の会議はそういうことだということでご理解賜りたいと思います。

◎委員長（豊口　協）

どうもありがとうございました。

ということで、この６ページのまとめられた案につきまして具体的なご意見をいただきますけれども、その前にさっともう一度目を通していただいて、もし何か抜けているようなことがあったらご指摘をいただきたいと思います。

２ページに独創企業生育都市という言葉でまとめられており、これ最後に出てまいりますけども、こういった今までのデータをベースにしてこの新しい一つの方向が出たと、こういうことになります。

それから、３ページ、元気に満ちた米産地という言葉で集約されておりますけれども、これも今までこの言葉に関係したさまざまなご意見をまとめてこういう形になっております。特にこの中では、ＷＩＬＬの方に書いてありますけど、おいしい水と食で来訪者をむかえるまちであるとか、ＣＡＮでは、おいしい水の恵みと、水や土とともにひとが育むというふうな非常に地域らしさの強烈な言葉がここに入っておりまして、それをベースにして元気に満ちた米産地という言葉が生まれてまいりました。

それから、４ページでございますけど、これもＷＡＮＴのところに書いてありますフィールドミュージアムという言葉、それからＷＩＬＬに書いてあります楽しく期待をもって子育てができるまち、さらに安心・安全に住めるまちとか、美しい河川、森林を次世代に残すと。ＣＡＮのところには、教育的環境と人材が育つ風土があるというふうなことで、それをまとめて世代がつながる安住の都市であるという言葉になっております。

それから、５ページになりますと、ＷＡＮＴのとこでは新潟県の中心になりたいというこれは非常に大きな願望でございますけども、そういうキーワードがありまして、さらにはＷＩＬＬの方では、地域に残る文化を結び、新たな文化を育むまちにしたいと、文化創造の地域にしたいということであります。

それから、独自の魅力を増進する。これは、ほかのところにないようなすばらしい魅力を何とかしてみんなで考えて育んでいこうということ。そして、ＣＡＮのところでは、それぞれの地域文化資源をさらに強く強烈に打ち出していきたいという連携の希望がございます。それをまとめた言葉として、世界をつなげる和らぎ交流都市という言葉で、非常にソフトに優しい言葉でここに表現をされております。

以上が今までの内容の検討した結果の四つの柱を構築したページになっておりまして、先ほども理事の方からお話ございましたけども、最後の６ページそれがまとめられております。もう一度この内容についてお考えいただきまして、これから具体的なご意見をいただきたいと思います。

はい。

◎委員（山本俊一）

今四つの柱を見させてもらったんですけれども、１と２は産業関係に起因するようなことが書かれて、それから３番目が少子高齢と、それから教育に触れられ、それから４番目が交流都市というふうになっているわけですけれども、私は産業のいわゆる製造関係だとか、あるいは農業、１次産業というのを特に別々にするというふうなのも一つのあれでしょうけれども、四つというふうな枠にするとすれば、例えばそういったものを一つの形にして、少子高齢と教育の関係が混ざって出ているわけですけれども、ここは米百俵というふうな非常にいい全国に発信したものもあるわけでございまして、この少子高齢と教育というふうなのを、混ざっているものを、やはり国よりももっと先駆けたような形の中での人づくり、あるいは教育というふうなものを一つの独立させたものにして、それにふさわしいような形のものの施策を出していったらどうかというふうに思って、ちょっと提案をさせていただきます。

◎委員長（豊口　協）

ということは、五つの柱にしたらどうかということですか。

◎委員（山本俊一）

五つでも結構ですし、ただ例えば産業という中で、いわゆる製造関係が一つと、それから農業というのが一つ抜きん出ているわけですけれども、柱を五つということでも、広げてもいいんだということであれば、できれば少子高齢の中に長寿だとか何かを入れるのではなくて、別に一くくりというのをひとつ出してもらいたいということです。それだけこの都市を支える分についてはそういったものが非常に

大切なものだし、むしろ国よりも先駆けたような形のものでもっと先進的な施策というふうなものも出せばその地域の一つの大きな力になってくるというふうに思います。

◎委員長（豊口　協）

はい、ありがとうございました。ご参考にさせていただきたいと思います。

ほかにご意見をどうぞいただきたいと思いますが。

はい。

◎副委員長（二澤和夫）

今日四つにまとめていただいたんですが、ちょっとこれとどういうふうに組み合わせて考えたらいいのか、質問かたがたお知恵があればお聞かせいただきたいんですが、合併をすると30万5,000人の都市になるわけです。そうしますと、30万人都市としての強みといいますでしょうか、そういったようなものが出ているんではないかと。新潟県の中心になりたいというふうな項目もあるわけでございますけれども、30万人都市としての強み、あるいは30万人都市でなければできないようなことが可能となってくるというふうな部分もあるんではないかと思うんです。そういうようなものとこの四つの柱との兼ね合いといいますか、どういうふうに整理したらいいのかなというふうなのがちょっと私自身よくわからないんで、その辺どういうふうに考えたらいいのか、もしあればちょっとお聞かせいただきたいというふうに思うんですけど。

◎事務局（北谷）

今のご質問にお答えしますけれども、ですから今四つか五つかというのは別にしましてそれぞれの項目で、先ほど申し上げましたけども、最後の６ページがあるわけです。６ページの中から今度は、６ページの右の話ですけど、右の外れた話ですけども、ページ外の話をしますが、このページ外には、だから30万人都市だからできる政策、お金をかけてできる政策事業が出てくるんです。別にしまして例えば県庁を持ってくるとか、大エキシビションセンターをつくるとか、そういうことです。それぞれの四つか五つかの地域ブランディングのところにそういったものがあって、この四つの上で今度は、今日は書いてありませんが、それをまとめて一つのキーワードというのはつくらなきゃいけないんで、これはまた今後つくりますが、そのキーワードがある。ですから、それぞれの項目でオンリーワンを30万人の力で目指していくと。最後にそれぞれの項目がオンリーワン、オンリーワン、オンリーワンになったら、やっぱりこの30万人都市、新長岡都市は日本に誇れる30万人都市、今よりはすばらしい夢が実現できるまちという、そういう将来構想の冊子にしたいなと思っております。

◎委員長（豊口　協）

ありがとうございました。

よろしゅうございますか。

◎副委員長（二澤和夫）

まとめる途中でございますので、全体がそういうふうな形になるということであれば、私も今お聞き

しましてある程度整理がつくのかなというふうな気がいたしておりますので、そういう視点がどうしてもやはり必要なんじゃないかなというような気がして発言をさせていただいたわけです。

それと、もう一点よろしゅうございますか。思いつき的に申し上げてあれですけれども、この四つのブランディング価値を言葉で表現されているわけでございますけれども、やはりこれは象徴であると同時に、一般の市民がこれ読んでわかるというふうなことも大変必要なんじゃないかというふうに思うわけです。それで、例えば５ページのところでございますけれども、世界をつなぐ和らぎ交流都市というのはこれ大体わかるわけですけれども、「ものがたり」競和国という「競う」という字に「和」という字が書いてある。字を見るとなるほどそうかなというような感じがするわけですけれども、この辺本当に市民にとってよくわかりやすいのかなというふうな点からいうと、もう少し言葉の練りといいますでしょうか、その辺の工夫があってもいいのかなというふうなことがちょっと気にかかっております。そういうことからいたしますと、ある程度統一的な考え方で四つの柱を、言葉を組み立てられているんだろうと思うんですけれども、ひたむき米というふうなものとか、それから未来人ですか、この辺とか、あるいは競和国というふうな新しい言葉が出ているわけですけれども、これ新鮮さと同時にやはり理解をいただくというぎりぎりの接点というのがやっぱり必要なんじゃないかなというふうな気がいたしておりますので、特に競和国というのはちょっとなじめるのかなという気がいたしております。

以上でございます。

◎委員長（豊口　協）

ありがとうございました。実は私もちょっと気になっておりましたけども、新しい言葉をつくるというのは、その言葉に対する解釈というのがそれぞれ全員が違うんです。それぞれが違った解釈をしてわかったような顔をしていると非常に大変なことになるということもありまして、新しくつくった言葉というのは、日本ではこういうことが好きなもんですからいろんなものつくっていますけども、やっぱり統一のイメージをつくらないようにしないといけないなという気はいたします。

それから、全体を通して今ご意見いただきましたけども、一般の人々が本当にこの言葉でわかるかどうかということ、これが一番大きなかぎだと思います。わからないと、ああ、どっかで何かやっているなということで、自分たちの問題としてそれをはっきりと認識しないで物事が過ぎてしまうというふうなことが起こってまいりますので、できるだけわかりやすくしなきゃいけないだろうと。

これはちょっとこの問題とは別なんですけど、私がやっておりました仕事で、博物館を設計する。美術館を設計する。子供たちが見に来たり、大人が見に来たときに、説明文があるわけです。その説明文を一番わかりやすく対象者として取り上げて書くのは、20字から始まって50字、一番多くても100字。しかも、その言葉を使ってある内容は、小学校の低学年の教科書の内容で表現をすべきであるというふうな一つのセオリーがありまして、そうすると大体すべての人々が理解をしてくれるということがあります。ですから、やはり内容が非常に豊富で多岐にわたっておりますけれども、できるだけ表現する文章は優しい方がいいだろうというふうな気がちょっといたしておりました。

どうぞご自由にご発言をいただきたいと思います。

はい、お願いいたします。

◎委員（野田幹男）

小国町の野田でありますが、ちょっと事務局にお聞きしたいんですけれども、４ページには子供さんが雪原を滑っている図がここへあるんですけれども、今までも会議の中で幾たびか議論になってきたこの雪問題、強いて言えばこの地域というのは一概に豪雪地帯と言われる地域なんですが、それぞれ若干の違いがありましても、今までも雪問題に対してはいろいろ議論を生んだところでありますけれども、私が見る限り、利雪、克雪というようなものがこの中に見えないようですけれども、私が見落としているのかどうか、どの辺にそういう部分が、雪問題についての表現がありますかどうですか、お聞かせいただきたい。

◎委員長（豊口　協）

はい、お願いいたします。

◎事務局（竹見）

お答えします。

こちらは、確かに世代がつながる安住都市ということで、高齢者と子供をつなげるということなんです。高齢者というのは過去を伝える人であって、子供たちというのはこれから未来をつくっていく人たちということです。こちらに書いてありますように、長岡の歴史というのが、２度の戦災に遭ったとしても人々の営みによって語り継がれてきたという歴史があってこういった題目にしたんですけど、つまり安住都市ということの中で、高齢者と、それから子供たちが住みやすいまちにしていこうという意味が含まれています。ですんで、今の委員さんが言われていましたように、雪問題ということになりますとやっぱり子供たちが、例えば豪雪地帯であったとしても子供たちが暮らしやすいまちにしていこうとか、高齢者の方も暮らしやすいまちにしていこうと、そういった意味も含まれているんです。今、構成各市町村で自治体ワークショップ行っています。今後地域別の整備方針等もこちらの中でいろいろ考えていくんですけど、こういったことの中で、じゃ安住都市ということで住みやすいまちにしていく場合には、こういった豪雪問題、雪の問題もこの中で考えながらつくっていくということになろうかと思います。

◎委員長（豊口　協）

よろしいでしょうか。

◎委員（野田幹男）

でき得れば、何らかの表現で雪対策の問題を地域住民にわかりやすいような形で未来像を示していただければありがたいというふうに考えます。

それと、先ほど長岡の助役さん言われましたように、あらゆる資料をまとめた、これは皆さん、事務当局はなかなか完璧に近い形でみんな拾い上げてあると思うんですけれども、それとは別にまた助役さ

んが言われるような本当に30万都市としての未来構想と申しますか、そういう夢を持てるようなやはり大きいプロジェクトと申しますか、地域住民に夢を与えるような施策もできれば取り入れていただければありがたいというふうに、私もそういうふうにお願いします。

以上であります。

◎委員長（豊口　協）

ありがとうございました。

ただいまのご意見は、６ページの右側にずっと書いてありますが、さらにこれにいろんなアイデアを付加していくわけです。ですから、今のご意見は、ここに書いてあります世代がつながる安住都市という項目の中で、高齢者ないしは子供たちが雪とともにどうやって新しい時代をつくり上げていくのかと。雪対策といいますか、その具体的な方法についてはこの右側にさらにアイデアをどんどん出していただくというふうなことになろうかと思います。今日の課題でありますこの右側に、この四つの項目に従ってさらに具体的な方法論をどうしたらいいかというふうなことが案としてどんどん出していただければ、この右側にまだ書いていない新しい施策がここでだんだん見えてくるんじゃないかというふうな気がいたします。

どうぞご自由にご発言を。

はい、お願いします。

◎委員（外山康男）

事前にちょっと配ったのをさっと目を通して、ちょっと感じた点２点ほどお話ししたいと思います。

その３に入るかなと思うんですが、私は新長岡をつくる場合何を求める、創造していけばいいかというとを考えた場合、日本一というのが、あるいは新潟県の中心都市になろうということが出ておりますが、やはり環境関係でも一番を目指してという点で、人に優しい環境創造都市の創造というようなことから、具体的にはこの中のＷＩＬＬの中にそれぞれ出ていると思うんですが、環境で一番になろうというような、これは環境というのは、自然環境、住環境、食、景観、みんな絡んでくると思うんですが、やはりそれを一つの目標に新長岡という都市をつくるという目標があってもいいんじゃないかなと思っています。

それと、ちょうど６ページのところに出てきますが、私が気に入ったなというのは、この中で新長岡という言葉が４カ所ほど出ておりますが、やはりただ長岡でなくて、この前の協議会では都市名は長岡でいいと言いましたが、こういう文章の中でやっぱり新しい長岡を皆さんでつくるんだということで、この新長岡という言葉が非常に、私は言葉の表現としては、皆さんが正しい長岡をつくるんだという表現では非常に適していると思っております。そういう点ではできるだけ、例えばこの下の方に、左側ですね。独創企業生育都市、下に「ながおか」と書いてあるだけですが、「新ながおか」とかと入れてもらうと皆さんが一緒になって新しい都市をつくるんだよとイメージがわいてくるんじゃないかと、こう思って、この新長岡という言葉は共通の言葉として非常にいいと思っております。

以上です。

◎委員長（豊口　協）

ありがとうございました。

はい、お願いいたします。

◎委員（米持昭次）

今ほどいろいろとお話がありますけれども、よくこれだけの多くの要望をここによくまとめていただいたということに私は大変感心しているわけでございますが、先ほどちょっとお話がありましたように、やっぱり子供が見てもわかる言葉というようなことも大事かなという感じが実はするわけで、私もちょっとこの４項目を見させてもらったとき、新しい言葉が先ほどありますようにちょっと目につくんです。

それはそれでいいんですけれども、これが新しい長岡市のまた新しい価値かなという考え方もあると思いますけれども、ちょっと目につきましたのは、最初の独創企業生育の生育、これもちょっと変わった言葉でございますし、それから私やっぱりフィールドミュージアムというのがこれ英語で、最近のはやりなんでしょうけれども、こうして見るとこれだけ英語が入っているんです。この意味はわかるとしましても、全般的にこれは受け入れられるかなという感じがちょっとしました。それから、世界をつなげる和らぎ交流都市というのがございますが、その前が世代がつながるという、つながるとつなげるがダブっているような感じもちょっと受けたものですので、例えば世界を結ぶということでいったらどうかなということをちょっと考えてみたりしたわけでございます。これは、言葉の使い方というのは大変難しゅうございまして、これが長岡だと、これが長岡の新しい価値だと考えればこれはこれでいいんですけれども、ちょっと私気がついたところを申し上げさせていただきました。

◎委員長（豊口　協）

ありがとうございました。非常に貴重なご意見だと思います。どうぞご自由にお願いいたします。

はい、よろしくお願いします。

◎委員（朝日由香）

先ほどの助役さんと山本さんのお話に共通することかもしれないんですが、今回のブランディング価値というところで四つのものを取り上げて一つの特徴的にするというのはとてもそういう意味ではおもしろいし、かなりコンパクトにまとめられているなというふうに感じるんですが、これは一つに抽出するべきなのか、先ほどもお話があったこの四つのもう一つ頭に冠がつくのか、それともここの中にくし刺しにしたらいいのか、その下に個々に全部ぶら下がるのがいいのかというあたりがちょっと見えないんですが、前回のところでワークショップでも出ていたと思うんですが、人財という、「財産」の「財」という形での「人財」、全部これを通してやっぱり人というところがかなり大きなウエートを占めるんだと思うんです。これどこをとっても、教育という形がいいのか、人財という形がいいのか、やはり人が育成されていったり、人がそこに主体的にかかわっていくというそういう、ここの中では老若協働みたいな言葉が出てくるんですが、もう少し老若男女だったり、それから住民という市民主体だったり、

何かそういったようなものが全体のくしを通してこの冠がつくんであればそういったような形のものを、人財みたいなところをもうちょっとどっかに特化したらいいんじゃないかなという印象を持ちました。

◎委員長（豊口　協）

ありがとうございました。今四つの柱になっているんですが、実は４本足というのは非常にバランスがとりにくいんです。３本ですと安定するんです。だから、この４本の足を安定させた状態で将来のまちをつくっていくというのは、形の上では非常にとりにくい形で構造だと思うんです。ですから、これを３本の柱にまとめて考えるのか、それとも先ほどお話ありましたように５本の柱にふやして少し考えるのか。これいすの足を考えますと、５本の足のいすもあるんです。３本足もあるし、４本足もあるんですけども、物事で一番安定するのが三つの柱だということがよく言われています。その辺をどうするかということが一つあると思います。

それから、もう一つは、30万都市というのは、昔は私もいろんな仕事をして、通じて聞いてきたんですけども、一番実は理想的な人口なんだそうです、30万が。それはどういうことかというと、一番コミュニケーションがとりやすい、情報が伝達しやすい、人々が交流しやすい、これ30万だと。これがふえていくとだんだん、だんだんコミュニケーションが荒くなってきて、情報が正確に伝わらなくなってばらばらになっていくと。ですから、30万というのは一番理想的な人口だよということを言われたことがあります。

それから、もう一つはトランスポーテーション、交通機関でその30万をつなぐというのは、非常にある意味では合理的に、経済的にできるんだということが言われています。それが60万、70万になると、人的な交流とか流れが非常に複雑になってきて難しい。

それから、もう一つはエネルギー問題で、これはライフラインなんかの問題ですけども、30万の一つのシステムというのは非常にこれは合理的につくりやすいというふうなことが言われていまして、これからの時代というのはコミュニケーション、要するに情報通信をベースにしたコミュニケーションと、交通機関、トランスポーテーションと生活のエネルギーであるということが言われて３本の柱と、こう言われているんですが、そういう点でいくとこの30万というのは何でもやりたいと思うことが可能な実は人口ではないかなという気がするんです。たまたまこれは30万都市になるわけですけども、そうなりますと小委員会等でご意見いただいておりますが、そのご意見の具体化を図る場合にこれ非常に行政としてはやりやすい。日本全国見渡しまして、一番先進性があって、一番早く整備ができていくまちになるんじゃないかなというふうな気がしているんです。

そういうことで、今日はここに４本の柱が出ておりますが、その右側にそれと線で結んでありますけれども、一応今日はこの４本の柱を議論のベースにしていただいて、右側に書いてあります総合地域のイメージの訴求であるとか、地域産品ブランドの活用であるとかといろいろ書いてあります。下の方には対内外的な展開の方法が書いてありますけども、この辺で少し具体的なご意見をいただければというふうな気がしておりますが。

例えばもうモノレールつくっちゃってよということでもいいと思うんです。冬は雪が降ると。地上を走るのはしんどいと。だったらモノレールをつくってもらって結んでくれれば一番いいんじゃないかと。

そうすると、それは観光資源にもなると。通勤用のモノレールはぐるぐる、ぐるぐる回っていて、観光用のモノレールはパーキングする駅ができていて、例えばそこで夜はそのモノレールが停まって、冬の山の花火がそこで見られるとか、雪にたたかれなくても車両の中から美しい景色が眺められるとか、そんなこともできるんじゃないかなという気がするんです。これは、30万都市だとかなり可能性が高いなという気が私はちょっとしているんですけども。そういうことでも結構でございますので、どうぞご意見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

それから、この新長岡市ということが非常にいいなというふうに今外山委員の方からいただきましたけども、じゃ新長岡市庁舎、建物どうするかと。やっぱり旧じゃ嫌だなと、こういう気持ちがおありになるんじゃないかなという気がするんですけど、いかがですか。

◎委員（外山康男）

30万都市になった場合、当然今この庁舎では、先般も話も出ましたが、全員が１カ所というのは到底無理な話ですけど、いずれ考えなければならない課題だとは思います。その場合どういう庁舎にするか、あるいは場所も長岡でいいんじゃないかという話も決定されておりますので、こういう想像もできれば楽しい方へ持っていきまして、一、二ということが、それも一つ目標だと思うんです。

◎委員長（豊口　協）

どうぞご意見ご自由にしていただいていいと思うんです。いいことに関してはどんどんお金使っていいと思うんです。と私は個人的には思っています、悪いことにお金使うのはまずいですけど。ですから、21世紀という時代がどういう時代になるかちょっとわかりませんけれども、この市町村合併によってそのまちの機能が新しくなるわけです。それから、責任も新しくなります。それから、義務も生まれてくると思うんです。その責任と義務と機能というものを本当に市民のためにうまく活性されるためには、恐らく今のこの市庁舎では無理だろうという気が私はするんです。そうすると、新しい新市庁舎というのは一体どこにどういうものをつくったらいいのかというふうなことが出てくるわけです。

ちょっと話が大きくなって申しわけないんですけども、ヨーロッパでＥＵになる前にパリにデフォンスという新しいまちができました。凱旋門の西の方にできた新しいまちですけども、これはフランスが新しい時代を迎えるにあたって、ヨーロッパの中心地としてのパリをもう一度つくり上げなきゃいけないということで、ちょうど凱旋門の西にあった貧民地を整理しまして、そこにデフォンスという、フェンスですけども、と言われているところに地下５階の人工地盤をつくって、その上に高層ビルをつくったと。世界のメイン企業のすべてのヘッドオフィスをあそこに呼んできたんです。将来、これから20世紀の後半から21世紀というのは、新しい世界をターゲットにしたコミュニケーションのシステムが活性化されて、その情報基地としてパリが機能しないと世界の中心都市にならないだろうということでつくり上げて、地下鉄とバスと車とそれぞれ人工地盤の中に層を変えて入れてまちをつくり上げた。あのデ

フォンスというところは、かつて大戦があったときにドイツ軍が攻めてきたんですけども、あそこの壁でもってパリへ入れなかったという由緒あるとこなんですけども、それでデフォンスと、こう言うんですけど、そういう一つの象徴的な場所にパリをつくり上げた。それが世界の中心として機能している。

ニューヨークも一時そういうことがあったと。今のドイツのベルリンがそれにかわる中心だということで新しいベルリンをつくってやっているわけですけども、これもまちを見に行くとちょっと驚くような新しい構想でまちをつくっている。

そういうわけで、少なくとも８市町村が一緒になって30万都市になったときに、日本中のほかの地域が、やられたなと、とにかく１度長岡へ行ってこなきゃ話にならないよというようなまちをつくり上げないと、市民の方も納得しないだろうという気がするんです。その方法論はやっぱりこの小委員会にある程度任されているし、アイデアが要求されているんだろうと私は思うんで、とにかく大きな夢でも構いませんし、今言っとかないと後で言ってもこれだめですから、大いにご発言をいただきたいと思います。ちょっと外れた話で申しわけないんですけども、そんな気がしております。雪が降って困るんだったら地下鉄つくってくれというんだっていいと思うんです。地下鉄ですと、270万の人口になると必然的に地下鉄をつくらないと都市機能は麻痺しちゃうんです。ですから、世界中の都市は全部270万になる前に地下鉄工事を始めている。長岡が30万から270万に急に膨れ上がる可能性もありますから、事前につくっといた方がいいという話になるかもしれませんけど、どうぞご意見をいただきたいと思います。

はい。

◎委員（村上雅紀）

意見というわけじゃないんですけど、さっき北谷事務局長が言った結果として中核都市になって30万都市になったときに、具体的に例えば子育て、寝たきりがゼロとか、そういうような、最終的にはそこへ持っていくというようなお話をされたんですけども、その新市将来構想って最終段階というのはどこにあるのかというのがなかなか見えないと、その答えが、意見が出しようがないみたいな部分というのが正直あるんです。いわゆる抽象的な言葉なんで、二澤助役が言われたように最終的にどこへ持っていくというか、その部分が見えなかったもんで、言葉を拾っただけでも、ひたむき米って何なんだろうかなだとか、ひたむき米ってひたむきな精神のお米なのかなとか、そういうのが、ちょっとよくわからない部分が私個人的にあるんで、何か意見を出すにもちょっと戸惑っているようなのが今の感想なんですけども。

◎委員長（豊口　協）

これは事務局でお答えいただくのが普通だと思いますが、私の個人的な今までの理解は、いつまでとか、いつになったらとか、そういうことはないと思うんです。とにかく我々これから第一歩を踏み出すわけですから、踏み出して一歩一歩進んでいって、将来はこうしたいと、例えば私個人の人生でもそうですけど、そうだな、28ぐらいになったら結婚したいなと若いころに思ったとか、それから社会に出るときにはこういう会社でこういう仕事をしたいなというふうに思ったとか、家が建てられるかわかんな

いけど、このぐらいの年になったらこんなふうな家が欲しいなとか、そんな夢を頭の中に理想で考えながら、一つ一つ、一歩一歩足を踏み出していったと。ですから、この構想も新長岡市が将来いつこうなるかということはなかなかこれはわからないことだけども、一つの理想郷としてできれば30年後にはかぎがないまちにしたいと、もう安心、安全でかぎという、ロックという言葉がこのまちからなくなると、長岡の人の辞書にはかぎということはないと、そういうふうなまちにしたいなということでもいいと思うんです、これは。どうですか、事務局。

◎事務局（北谷）

前々から申し上げていたつもりなんですけども、この新市の将来構想が例えば10年後に、その目標に向かって10年後は50％をやっていくとか、そういう話じゃないということをご理解いただきたいと思います。今委員長がおっしゃいましたけども、だから新しい市として、新長岡市として一歩を踏み出すわけですから、何のために踏み出すかと。だから、将来30年、50年後にはこうなっていたいと、こうしたいんだという、そういう設計図をつくっていただきたいというのがそもそもこの小委員会の趣旨でありまして、50年でと思ってやったものが10年でできればそれはハッピーな話ですから、それはそれでよろしいんじゃないでしょうか。今10年、15年後にここまでやらなきゃいけない、この項目はこうしなきゃいけないというのは、今この時点では、我々の能力では不可能です。

◎委員（村上雅紀）

そういう角度で聞いているわけじゃないですけど、これ長岡という言葉を外した場合に、例えばどこのまちに行っても何か今の時点では通用する言葉のような気もしないでもないんです。

◎委員長（豊口　協）

私が理解しているのは、今ここで新長岡市と、こう言っています。今までアンケートをしたり、ワークショップで議論いただいたり、それからヒアリングをしてまいりました。その一つ一つの言葉が全部新長岡市のカラー、個性を持っているんです。例えば関西の地域で雪が欲しいと言ったって、これは降ってこないわけです。もう逆立ちしても降ってこない。ところが、長岡地域には神の恵みの雪が降っている。その雪の下で一つの文化が創造されて、山古志村では隧道ができたと。あんなの雪国でなきゃできないものができているわけです。そういう文化的な遺産とか歴史的な結晶というのが、実はこの間のワーキングショップでやってみたらもう空の星ほどたくさんあったと。もう整理し切れないぐらいたくさん出てきて、それが今までの地域にしかなかった財産が、８市町村一緒になることによって物すごくふえたわけです、財産が。これはもう８市町村、長岡市の市民の宝です。そういうものを一つの個性としてぶち出していくと。

私従来の都市計画というのは、今たまたまおっしゃったように、都市の名前を変えればみんな同じだというふうな従来のコンサルの手法があり、私このようなコンサルはけしからんと思っているんですけども、日本中を画一化しちゃったという結果があるわけです。今度はこうはさせないというのがこの小委員会であり、市民パワーであり、今回のコンサルだと思うんです。違うんだと。今までは、戦後の都

市計画というのは、コンサルに任せて日本中が同じになっちゃったと。雪国にあっちゃいけないようなまちが、東京の小都市みたいなまちが雪国にできて、すってんてん、もう困っちゃって、雪をどうしたらいいかわかんなくなっちゃったというのたくさんあるわけですけども、そういうことはしたくないと。

そこがこのかぎだと思うんです。だから、そうしたくないためには我々何をしたらいいか、我々の責任でどれをどう外してどうするかということは、ここで提案して具体的に諮っていかなきゃいけないだろうというふうな気がしておりますが。

◎事務局（北谷）

私は、やっぱり村上さんが今お話しになったように、大阪だとか表日本の方は違いますけれども、こちらの方の裏側の方から少しずらせば、集約してくるとやはりこういうふうなことが当然出てくるんだろうというふうに思うんです。そうすると、これが長岡であっても、富山の方のものであっても、大体同じようなものが出てくるだろうと。そうしますと、長岡らしさというふうなのはやはり覚悟だと思うんです、何をやるんだと。先ほどちょっとお話ししましたけれども、つながることは、朝日さんもさっき話しされましたけども、人づくりだと思うんです、一つのつながりは。そうすると、この中にはそれだけの人材がいなければ成功しないというのが一つあるわけです。そうするならば、私どもの方は人をとにかくつくろうと。そのためにはどうやったらいいんだと。それは先ほど申し上げたように、国よりも先駆けて、国が補完できないようなものを、私どものここでやろうやというふうなもので一つの大きなものになるんだろうというふうに思います。そうしますと、私どもの方は地域の方々に、新しい長岡はこういうことをやるんだというのを、はっきり差別されたような形の中でやるんだというのになれば非常におもしろいんだろうというふうに思いますけど。

◎委員長（豊口　協）

そのとおりだと思います。ですから、これから具体的な展開について、何をやったら長岡らしいもの、まちができるのか、地域ができるのか、これ四つの今出ている柱というのは、おっしゃるように長岡という個性はここにはないと思います、まだ。右側に書いてある対外的な要素と対内的な要素に何を一体つけ加えることによって新長岡市ないしは長岡、新しい地域のイメージが浮かび上がってくるかと、そういうことになると思います。一つの提案として今人材育成というふうなお話がございましたけども、これは歴史的に、伝統的にそういうものがこの地域にあるわけですから、それを一つの柱とするということは可能性がかなり高いだろうという気がいたします。それから、既につくり上げてきたお米の文化というのは、これはもう不動のものだと私は思っていますけども、そういうものもあるんではないかと。

それから、もう一つは、これちょっと物理的なことで申しわけないですけども、日本一の大河、信濃川が流れていると。この川と水ということに対してここに住んでいる人たちはどう思うかと。特に今土器の問題が盛んに象徴的にとらわれていますけども、あの火焔土器と称する土器は実は縄文土器と言っていますけども、縄文時代の一部に、ほんの2,500年ぐらいの間にしか出ていないんです。しかも、縄文時代というのは、日本全国ですけども、あの火焔土器というのは信濃川の流域にしか出ていないと。だ

から、私は火焔土器じゃなくて信濃川土器だと思っているんですけども、余り変なこと言うと怒られるんです、小林先生に。だから、言えないんですけども、火を形どった造形物というのは人類の歴史には信濃川の流域にしかない、もし火焔土器と言うならば。すべて水なんです。中国のＳ字型も水なんです、龍ですから。地中海へ行っても、南米へ行ってもみんな水なんです、形づくっているものは。なぜ日本にだけ火を形づくったものがあるかというのは不思議なんですが、そう文部科学省の教科書にも書いてありますから何とも言えないんですけども、私はあれは信濃川の水紋を形どってつくったものではないかなという、個人的には。私は素人でありますから、そう思っておりますけれども、そういう文化的な一つのつながりがある地域であることも事実なんだと思うんです。だから、そういうものも特徴になってくるだろうというふうに私は思いますけど。そういうことで、村上さん、いかがですか。

◎委員（村上雅紀）

いや、言っていらっしゃることはわかるんですけども、さっきちょっと二澤助役が、中核都市になったらもっとできることがたくさんあるんじゃないかと言われたときに、ああ、そうだよなと思ったんです。そしたら北谷事務局長が、いや、それはこれからなんだという部分でおっしゃったんですけど、それすらちょっと私どもで見えなかったというのが私の方であるんで、私が最後の落としどころという部分が見えなかったものでちょっと聞いたんですが。

◎委員長（豊口　協）

今はおわかりなんですか。

◎委員（村上雅紀）

わかりました。

◎事務局（北谷）

私参考で冒頭に申し上げたつもりなんですけど、今日はいわゆる地域らしさという四つの柱が出てきたんですが、これはイメージなんです。だから、いわゆるキャッチコピーなんです。造語というか、独創企業生育都市とか書いてありますけども、だからこのイメージでわかるかどうかということをできればご意見をいただきたいんです。こんなの全然わかんないと、今の長岡にマッチしていないし、おかしいんじゃないのというんであれば、そういうことを言っていただきたいと思います。

それで、先ほど朝日さんの方からも、この四つの柱の上に何かこれをくし刺して一つのものがあるのかと。私はつくりたいと思っています。ただ、それも皆さんのご意見を賜りたいと思っています。つくる必要がないと言えばあれですし、委員長が４本だと座りが悪いから三つにしろというご意見があればそれは三つにすればいいし、五つなら五つでもいいしと思っています。私はこの上に一つ、先ほど人材育成が大事だということがありますから、言葉は別にして新世紀の、新しい世紀の、21世紀の米百俵みたいな、そういう言葉、イメージでそういうことなんだな、新しい米百俵の精神なんだなというのが例えばこの上につくとか、だからそういうことを今後我々も考えていきますけれども、今日は四つの柱、これはあくまでブランディング、イメージなんで、これについてご議論いただきたいということが主体

であったわけであります。

　それで、先ほど冒頭申し上げましたけれども、この６ページの右隣、ここにだから具体的に、今我々自治体の８市町村の職員が集まってワークショップ等もやっています。その８市町村の人間は、いわゆる各自治体の長期計画、総合計画のスペシャリストが集まって議論をしているところです。ですから、そこから逆に引っ張ってこれるものと、これとミックスして、また次回にはできるだけお見せし、ご議論いただきたいなと思っております。

　ですから、先ほど委員長もおっしゃいましたけど、この四つの言葉だと何のことかよくわからないし、長岡らしくないんであれば長岡らしい言葉に変えていただきたいし、それが無理であればこの四つの言葉をいかに補完するような、この下の例も重点実施項目もというか、できるだけ早く実施、実現したい姿というものを出していただければより長岡らしくなっていくんじゃないのかなというふうに思っております。

◎委員長（豊口　協）

　ありがとうございました。ということで、この６ページ、これを一つのたたき台として新しい次への展開のキーワードをいろいろ出していただきたいと、こういうことでございます。前にもちょっとお話ししましたけども、自分が今度新しいまちを担っていく責任者になったときに、今日出されたこの四つの柱とさまざまな条件、これをベースにして具体的に展開しようとしたときにどういう新しい方法論があるかということもあるだろうと思いますけど、一番よくないのは、今お金ができないからできないだろうというふうなことは今日は外しておいていただいていいと思うんです。特にここにお金が積んであると、うわっと。もうその金をいかに効果的に使うかということを前提としてアイデアを出された方がいいような気がしますけども。

　どうぞ。

◎委員（山本俊一）

　ちょっとお聞きしますけれども、新潟県の中央に位置して、そして新潟県そのものが全国的には非常に一、二を争うような大きい面積のわけですが、将来道州制でどうなるかは別として、私は率直に申し上げて空港が一つぐらいあってもいいじゃないのという夢を持つわけです。それで、採算ベース云々ということになるとこれまた議論が違ってきたり、あるいは冬の雪ということになるといろいろの問題がありますけれども、夢とすれば、地域住民がやはり30万都市を目指して将来構想ということになると、その辺のお互いが夢を実現する努力があってもいいのかなと。

　そして、このキーワードの中に世界をつなげる和らぎ交流都市ですか、そういうようなものからしても21世紀は地球規模で物を考えなきゃならんわけでありますので、でき得るならばそういう未来ビジョンを持ってもいいんじゃないかという感じがいたしますけれども、採算ベースということになりますと我々素人じゃちょっとそこまで計りかねますけれども、でき得ればお答えいただければありがたいというふうに考えます。

◎委員長（豊口　協）

いや、非常にいいご意見だと思います、私個人は。何か魅力がなければ人は集まってこないわけです。

人口を増やそうと言っているわけですから、人口を増やすためには何かなきゃ人は来ないわけです。

昨日の議会中継ちょっと拝聴しておりまして、長岡には四つの祭りがあるとおっしゃっていました。一番集まってくるのは花火のときの長岡祭りですか、これで75万ぐらい集まってくると。ほかのお集まりは５万5,000とか、７万5,000とか、２万5,000とか、そんなもんだと。こういうのは祭りとは言わないんだというふうなご質問をしていた議員の方がおられました。私が思うのは、だからどうのということじゃなくて、じゃ365日75万人が集まってくるまちにしたらどうなのかということなんです。その方法論を具体的に検討した方が利口であって、市は何をやっているんだと、四つのお祭りやっても７万5,000とか５万5,000しか集まんないじゃないかなんて、だれでも知っていることなんです、こんなことは。だから、それをこうしたらもっと人が来るよというふうな意見を言うのが私は議員の方の意見だろうと思ったら、何か変なこと言っちゃいけない。そんなことじゃ困るよと、こう言っているわけです。困っているのはみんなが困っているんだから、やっぱりそれがわかっていらっしゃるんだったら、ちゃんと具体的に常時75万人が大手通りに集まってくるという意見を私言うべきだと思うんです。そうしなかったら話は進まないと思うんです。

だから、今回もこれ30万都市になると非常に理想的な人口だと思います。それをさらに45万、50万にしていくためには一体何が必要かということです。すると、ここでみなさんが意見おっしゃっているように、社会福祉だとか、高齢者対応だとか、それから教育の麻痺だとかとおっしゃっている。これ全部当てはまっているわけです。それを促進させるために、さらにハードをどうするか、新しいソフトであるならばそのソフトが何であるかということを付加していくことによって可能性が見えてくると思うんです。ハードはやっぱりお金がかかります。ソフトもかかりますけども、しかしほかのまちにはないようなハードをつくり上げる。箱物なんて言っていますけど、従来どこにもなかった箱物というのは私はあるだろうと思うんです。みんながやっぱりその箱物を見に集まってくると。見に来た途端にどうしてもここから離れられなくなって長岡へ住んだ、これでもいいと思うんです、空き地がいっぱいあるんですから。こんなに空き地のある30万都市ってないです。と私は思います。本当にすばらしいです。ほかの都市へ行くと間抜けです。間がないんです。長岡は間があり過ぎるんです、どうしても。だから、すばらしいと私は思うんだけども、やっぱし間抜けのまちにしないように、間をうまく生かすような方法を考えていく必要があるような私はずっと気がしているんですけど、ですから地下鉄でもモノレールでもいいと思うんですけども、何かそういうもので、例えばコミュニケーションが非常に必要であれば、もう雪の降っている最中でもコミュニケーションがうまくいくようなそういうハード、ソフトを考えたらどうかとか、いろいろあるという気はするんですが。

はい。

◎副委員長（二澤和夫）

ちょっと答えれという話ですので、飛行場のことでちょっと説明しますけれども、ご承知のように飛行場というのはどこにもありますけれども、飛行場に一旦降りてアクセスがいい飛行場というのはなかなかないわけです、成田空港なんか特にそうですけれども。そういう点からいいますと、東京にも近いし、上越新幹線があるし、高速道路があるし、結節点に飛行場を設けるということは、その後のアクセスにおいて私は非常に利便性があるし、有用な飛行場になり得る可能性が非常にあると思うんです。そういうことと、今委員長がおっしゃったように空間はまだあるわけでございますので、そういう点からいえば採算性の、経済性の問題はこれから詰めるとしましても、可能性としては非常にいい空港ができる可能性があるんだということは前々内部ではちょっと議論したことはございます。だから、そういう意味においては、30万都市ですから飛行場があってもいいんじゃないかというふうなことは当然考えられるんじゃないかと。答えになっているかどうかわかりませんけれども、そんな気がいたしております。

◎委員長（豊口　協）

もっとおもしろいことは、例えば長岡を新幹線の終着駅にするんです。東京行き、上越行き、秋田行き、青森行き、全部ここから出すんです。全部こっちへ持ってくるんです。それだってできると思うんです。今途中の駅だと、こう言っていますけども、新潟で停っちゃっているわけです。今上越の方へできるから大変だ、大変だと言っているけども、長岡を新幹線の終着ターミナルにして、そっから全部地方へ出していくと。すると、これは交通機関の拠点になるわけです。マストランスポーテーション。今できているからそのままうのみにしてそれを使おうというんじゃなくて、そのときに問題が起きてくるのが今空港の話だと思うんです。長岡の近くに空港をつくるのか、新潟空港を長岡空港と名前を変えて使わせてもらうのかということです。この方法論なんです。なぜそういうことやるかといいますと、今成田いっぱいなんです。羽田も大変なんです。人ばっかり来て、荷物入れるの大変なんです。エアカーゴは長岡空港へ持っていらっしゃいと。人は要らないと。荷物だけでいいと。そのかわり新幹線は１時間に１本とか、あと貨物列車を走らせると。ここを拠点にして、秋田、青森、福島、上越、東京へ貨物列車を走らせると。物流で拠点になるわけです。長岡そんな物流嫌だよとなったら、じゃ新潟ちょっと貸してよといって新潟空港を借りて、長岡のお金でもって新幹線空港までつなげて、3,000メートルの滑走路にして全部荷物を降ろしてもらって、新潟素通りしてこっちへ持ってくる、これもできると思うんです。これはすぐやれと言ってもできませんけども、そういう計画をやるよと決めて、みんなでやろうよと議会で決めればやらなきゃいけませんから、一歩一歩やればいいと思うんです。そういう何か本当に長岡が変なこと考えているけども、やる気でいるよというようなやはり計画を少しはつくっておかないとまずいんじゃないかなという気がするんですけど。

はい。

◎委員（朝日由香）

ちょっと漠然としているんですけども、先ほど人材という話お話しをしたので、つくばなんかですと産学が一緒になって、いわゆる若手経営者を育てるための学校のようなものが、設備も整って相当情報

量が集積されているようなそういう拠点があるわけです。ここでも価値としては独創企業生育都市みたいな形で出てくるんですけれども、その産学をあわせた具体的なそういう教育拠点といいますか、もっともっと本当に起業家を育成するような教育拠点だったり、研究開発する、例えばお金の話もここに出ていますけど、そういう幾つかのものをやっぱり研究開発できる施設といいますか、これも子供たちが体験したり、いろんな地域の人も見学したりできるような、そういう教育施設といいますか、かなりハード的にはお金がかかると思いますけど、そういったものがあったらおもしろいなと。

◎委員長（豊口　協）

私も大賛成です。もっと具体的におっしゃっていただいた方がいいと思うんですけど。例えば長岡に国立の技術科学大学、まもなく法人化に変わって国立から離れるはずですけども、そうしたらもう国のうるさい管理がありませんから徹底的に使えるわけです。それ以外長岡大学という経営系の大学ありますよね。長岡造形大学とデザイン、クリエイティブなものをつくる大学がある。それを一遍ぐしゃぐしゃにまぜて人材創造の大学というのをつくり上げちゃう。

今ちょっとこれは私的なことで申しわけないんですけど、余り市長に言っちゃいけないと言われているんですけども、長岡造形大学の隣の昔砂利工場がありましたあそこの一部を買わせていただきました。

なぜ買ったか。あの土地7,000平米あるんですけども、二つの工房をつくりたいと思っているんです。

一つは、市民の市民工房です。長岡市民の方たちで、例えば染めをやってみたい、織りをやってみたい、ガラスをやってみたい、彫金をやってみたいという家庭の子育てが終わったような主婦の方とか、これから自分の人生を歩んでみたいと思っていらっしゃるようなご婦人ないしは男性の方に来ていただいて、昼間からそこで実際に教育を受ける。大学の中でやろうとすると、これ授業やっていますから、お互いにリストアップしてうまくいかないから、その専用の工房をつくりたいと。そこでだれが教えるのか。これは、大学院を卒業した学生です。実際に自分が手と足を動かし、頭を使って、そこの学生さんと一緒になって朝から晩まで物をつくると。物づくり、そういう工房をつくりたいと。

もう一つは、造形大学の先生方の発想、創造の工房です。要するにベンチャービジネスじゃありませんけども、先生方が考えたものを具体的に企業に提案をして、その企業と一緒にコラボレーションして、それを具体的な商品として産業を興していくというベンチャービジネスを興すような工房をつくりたい、それが私の将来の夢なんです。そのために土地を買ったんです。それはもういつそこに工場ができるか私わかりません。まだ決めていませんけども、まず土地ありき。昔から言います、隣の土地が空いたら女房質入れても買えと。だから、女房いませんでしたけども、とにかくそこを買ったと。それで次のステップに入っていく。私がいつまでも学長やっているわけじゃありませんけども、そういう目的で買ったから、君たちあと頼むよといって渡していけるわけです。それもやはり新しい人材育成のためには一つのベースとして機能するだろうと私期待しているんですけども、そういうことをやはり新しい新長岡市の場合にはやんなきゃいけないだろうというふうな気がします。だから、既設の大学は大学であるよというふうにほったらかしにしておくんじゃなくて、一遍ぐちゃぐちゃにしてみたらどうなるかという、

その方が私は大学としてはいいんじゃないかという気がしますけど、特に国立大学は。ちょっとまずいですね。今日はちょっとオフレコがたくさんございまして、申しわけございません。

◎委員（朝日由香）

あともう一点いいですか。

◎委員長（豊口　協）

どうぞ。

◎委員（朝日由香）

これも現実的なものかどうかわかりませんけれども、テレビでちょっと見たことがあるんですが、ものすごい山間地の高齢者がインターネットとかそういったものを使いながら、70歳とか80歳になっても事業をやっているんです。それは地域の資源を生かしたものをコーディネートする人がちゃんといて、そういった人たちがそれを産業化していくというような、高齢化しても社会に貢献できるという、そういうソフトの運用といいますか、そういう仕組みづくり、それは高齢化だから介護をされる側じゃなくて、もう本当に生涯現役というような何かそういう仕組みみたいなものがつくれると、例えば山古志でも栃尾でも、栃尾にいながらにして世界にとか、そこから各地域の中にいつでも発信したり、それもいろんなものが供給できるというような、そういう仕組みができるとおもしろいなと。それにはインターネットだけではなくて、もうちょっと違う仕組みが必要なんだと思うんですけども。

◎委員長（豊口　協）

またこれちょっとまだ言っちゃいけないことなんですけども、大学の中にもテニスコートの手前に整地した土地があるんです。それは何をつくろうかとしているといいますと、メディアセンターなんです。

そこで、最高のインターネットとコンピューターとのすべての設備を入れたセンターをつくりたいんです、メディアラボ。それは大学ではできないんです、お金がかかって。そこに今おっしゃったようにすべての人とのコミュニケーションができるインターネットをつくって、さらにそういう人たちに情報交換をお互いにやって、企業の方たちもやって、技術の相談もやって、交流もやって、コラボレーションもやっていけるようなセンターをつくりたいと。土地は用意してあるんです。新潟県の企業、大学院全部回ってお金を出していただくと。そこへつくり上げる。運営は大学がやると。しかし、使う方はお金を出した方。100円でも、1,000円でも、１万円でも、10万円でも出してくださったら自由に使って結構ですということで、そういうメディアラボをつくりたいんです。土地はあるんです。まだ動けないんですけども、やりたい。

なぜこんなばかみたいなこと考えているかといいますと、アメリカのディズニーランドってご存じですよね。ディズニーワールドというのがフロリダにありますけども、これ30万都市てなもんじゃないです。大変な広さで、大変な都市になっております。まちつくっちゃった。それから、そのまちじゅうをモノレールが走っているわけです。巨大な湖もつくっているわけです。ホテルなんか数十軒もありますけど、おそらくあれは今度の30万都市の長岡地域よりは広いんじゃないかと私は気がしますけども、そ

れをディズニーがつくってしまった。それをつくったときの技術的なアイデアをどこが出したかというとＭＩＴです。マサチューセッツ工科大学です。今マサチューセッツ工科大学と、それからディズニーが組んで世界制覇の新しいアイデアをつくっているわけです。それに負けちゃまずいわけですから、やっぱり頑張んなくちゃいけないと。小粒でぴりっと辛いような設備を日本でもつくって、いろいろ日本独特のものをつくり上げていくということは必要だろうと私は思っているんですけど、やはりそういう何かいろんな知恵のコラボレーションによって新しい長岡らしさみたいなものが生まれてくる。それが何かということを早く見つけた方が勝ちだと思うんです。先にやった方が勝ちだと思うんです、日本中が今動いていますから。ですから、今朝日さんからおっしゃっていただいたインターネットというか、情報交換のシステムというか、それはもう早くこの30万都市としては手をつけてやらなきゃいけないことだろうと思います。

どうぞ。

◎委員（北村　公）

一応この案についてここまではやるということですよね。

◎委員長（豊口　協）

この先まで。

◎委員（北村　公）

この先を今やっているんですか。

◎委員長（豊口　協）

はい。

◎委員（北村　公）

いや、これはもうこれでもってやると。

◎委員長（豊口　協）

一応今日はこれで終わりにします。

◎委員（北村　公）

一応終わりですか。

◎委員長（豊口　協）

この右側に、見えないところにアイデアを出していただくと。

◎委員（北村　公）

ここでとりあえず合意形成をしていく意味で、皆さんのいろいろの意見私も聞いてあれなんですけども、長岡のところを、ちょっと話戻して悪いんですけど、これやっぱりとりあえず新長岡をつけた方が、非常に地域の人たちもこれからまた８市町村に帰って話をするときに混同しないでいいのではないかなというふうに思います。できるだけ、先ほど皆さん言われていましたけれども、横文字をわかりやすい言葉でやった方がいいんじゃないかなと。それの方が、これ当然地域に帰ってまた質問を受けたり、話

をする場合に、余り横文字を入れるとやはり理解しづらい人も中にはいるでしょうし、そういう意味でここまでのことについて、案でこの場で決をとるんであれば、決までいかないのかもしれないですけれども。

◎委員長（豊口　協）

とりません。

◎委員（北村　公）

とらないんですね。じゃ、それならばいいんですけれども。

◎委員長（豊口　協）

これは事務局で今までのいろんなご意見をまとめてみたらこういうふうにまとまりそうですよと。しかし、これが最終案ではなくて、これをもう一遍たたいてくださいと、こういう提案です。ですから、今日いただいたご意見でさらにこれを整理していただいて、次回またたたき台が出てくると、こういうことです。

◎委員（北村　公）

なるほど。

◎委員長（豊口　協）

ほかにご意見ございませんか。

◎委員（二澤和夫）

ちょっと戻ってあれですが、ブランディング価値のところで、さっき見附市の山本委員の方から出されましたけれども、五つに割るか三つになるかという話ですが、その辺ちょっと意見申し上げますと、この独創企業生育都市と元気に満ちた米産地を一緒にするとやっぱり経済というふうな言葉になろうかと思うんです、共通語とすると。そうなるとちょっと、この米という意味は、先ほど説明を聞いていますと、やはり文化だとか、歴史だとか、いろいろのものが込められているわけでございまして、どちらかというと上段の方は最先端企業みたいなものを目指すというふうな意味でございますので、それを一緒にするというのは若干無理があるのかなというふうな気がいたしておりまして、どうしても必要ならばやはり四つから五つに分けるというふうなのも一つの手なのかなというふうな気がいたしておりますが、委員長さんおっしゃったように、この辺の意見を聞いてまた次回検討いただいて出していただくことになるのかもしれませんけれども、そんな気がしております。

◎委員長（豊口　協）

ありがとうございました。

ほかにございませんか。

それから、名称は新長岡地区ですね。

◎委員（外山康男）

私はその方がいいと思います。

◎委員長（豊口　協）

それから、できるだけ横文字、片仮名は使わないで説明をしてほしいです。これ本当困ります。今回のこれはわかりますし、英語の場合わかりますけども、どこの言葉かわからない言葉がいっぱいあって、どの辞書を引いたらいいのかわからないというようなこともたくさんございます。

◎委員（山本俊一）

委員長さん、ついでに日本文字のものも、助役さんがおっしゃったような楽しんでいるような部分もあるんでしょうけれども、そのあたり一般の方々に出したときに何か、私ども説明しんきゃだめなんですので、その辺あたりどういうもんでしょうか。ひたむき米なんていうのは、ちょっとどう考えても切ないみたいな感じなんですが、わかるんですけど。

◎委員長（豊口　協）

言葉の使い方をいろいろもう少し配慮してほしいと、こういうご意見だと思います。

ほかにございませんか。

はい、お願いいたします。

◎委員（坂牧宇一郎）

地域エゴになってはよくないというご意見もあるかと思いますけど、先ほど委員長さんが言われたように、私ども手堀り隧道という資源があると。ある人に言わせると、それも一つの文化だというようなことを言っておられまして、それは公共事業の原点でもあるかと思うんですけれども、この中で６ページの右側の方に入っておりますけれども、棚田、景観とかそういう部分の中にも、今一生懸命やっております錦鯉の関係、そういうものが、田んぼだけじゃなくて池も立派な景観になってくると。それは産業の方としてとらえていいのかどういうのかちょっと理解しがたいんですけども、ご理解いただければありがたいかなというように考えております。

◎委員長（豊口　協）

どうもありがとうございました。

はい、お願いします。

◎委員（熊倉幸男）

ちょっとまた戻りますけれども、さっきの４本柱と３本柱も出ましたし、それからまたわかりやすい言葉ということでございますが、わかりやすい言葉としては、この元気に満ちた米産地というのは一番わかりやすいと思うんです。しかし、この四つの柱から見ますと、あとの３本柱は全部都市がついています。そうしますと、何かこれだけがちょっとバランスが外れたような感じがするわけです。その辺場合によっては、先ほど話がございましたように、バランスをとるためにさっきの、いま一つの柱を加えるとかという、そういう形もいいんじゃないかと思うんですけれども。

◎委員長（豊口　協）

どうもありがとうございました。

ほかにございませんか。個人的に私も米というのは、これは絶対的な一つのキーワードだろうという気はします。これから将来地方自治が固められていくわけですから、国からの施策をそのまんまやる必要はないわけです。そうすると、田んぼを休ませるということもやらなくていい時代が近々やってくるだろうと。すると、徹底的に米つくればいいと思うんです。それで、独自に輸出すればいいと思うんです、これは。ほかのところは田んぼを失くしているけど、新潟はもう徹底的に米つくって輸出する、東京に売りつける、これをやるとやっぱり特徴として出てくると思うんです。今全国均一でもって減反、減反とやっていますけども、そういうことは、この日本列島というのは北から南に長いわけですから、それぞれの植生というのは違っているわけで、米のでき上がり方も違うし、味も違っているわけなんですけども、そういう特徴はやっぱり個性として生かすべきだなという気がしますんで、この元気に満ちた米産地という言葉は、私非常に好きなんです。

はい、マイクございますか。

◎委員（小池　進）

新しい長岡らしさといいますか、これをどういうふうに考えるかということでいろんな立場からまとめ上げられたわけですが、非常にまとめ上げると抽象的な言葉になってくる。当然だと思いますけど、私らこれ読んでみてもぴんとこない。もっとそれぞれの市町村が、それぞれの地域の持つよさを一層伸ばして、全体として調和のとれたそういう長岡らしさというもの表現できないものかなというふうに、そういう側面もあるんじゃないかというふうに思ったわけです。まとめるとこういうふうになるのかな、どうかなというふうに感じているんですが、非常にもっと、例えば四つの項目はこれでいいとしましても、その右側の項目も何か抽象的な面があるんじゃないでしょうか。もっと具体的に表現できないのだろうかなというふうに、それぞれの市町村が持つよさといいますか、具体的には、例えば農業ということになると中之島、越路というのがばっと出てくるわけです。醸造が盛んなところということはすぐ出てくるわけです。長岡は昔からテクノロジーを中心とした工業が盛んだったわけですから、そういうようなもの出てくるわけですが、そういう言葉に置きかえられないのかなというふうな感じもしているんです。その辺またお考えいただくと優しい言葉に変わるんじゃないかと、きちんと一般の大衆が見てわかりやすい事柄になるんじゃないかなと、こう思いました。

以上です。

◎委員長（豊口　協）

私の理解は、今おっしゃった右側の言葉、文章非常に抽象的だとおっしゃったんですけど、これは抽象的でいいと思うんです。今我々が議論しているのは、この先の具体的な提案を事務局は期待しているわけです。ですから、これはこれで抽象的であるということは、具体的な提案を期待するためにこれは抽象的になっております。言葉を引っ張り出すためのこれは誘い水というふうに私は理解しています。

ですから、これは決定した事項ではなくて、誘い水としてここに、右側に対外的、対内的な条件が書いてあって、今日の私たちの責任はさらに右側の、ペーパーがないんですけども、これを具体的に個性

をつけるためにはこういうことをやった方がいいよと、こういう言葉があるんじゃないのと、こういう内容のものがここに欠けているんじゃないのということを実は今日事務局は待っていたと。それをベースにしてつくっていくと、こういうことです。

◎事務局（北谷）

はい。

◎委員（北村　公）

先ほどここで議論のあった物流を目的にした空港をやろうとこの右側の話をしていたわけですけれども、総合イメージの６ページの一番上のとこですけども、もう新潟首都圏、日本海圏なんか言わないで、もっと大きな枠組みでもってここへ書いた方が形としてはよろしいんじゃないでしょうか、先ほどの右側の話をするのであれば。と思います。

◎委員長（豊口　協）

さっきの長岡拠点都市という話も随分ありますけども、だから私は交通の拠点都市というのは絶対やっていただきたいと思っているんです。

ほかにいかがでしょうか。よろしいですか。

「なし」という声あり

◎委員長（豊口　協）

いろいろご意見いただきましてありがとうございました。ちょっと行き違いがあったりして何となく消化不良で終わられた方もおありになるんじゃないかという気もしますけども、こういう形で一つ一つ抑え込みながら具体的な個性のある新長岡地域、新長岡の新しいまちを自分たちの力でつくっていこうという歩みだと思います。今日いただいたご意見を整理いたしまして、また事務局の方でこの内容について検討して、次回一つのたたき台を出してくださるようです。それについてまたいろいろとご意見をいただいて進めていきたいと思っております。どうもありがとうございました。

それでは、事務局の方へお返しいたしますが。

◎事務局（高橋）

大変どうもありがとうございました。

それで、今お話が出ましたが、次回の小委員会の日程でございますが、７月15日、来月の15日、火曜日でございます。時間は、今日と同じ夜の18時30分から予定しております。また正式にご案内を差し上げますので、よろしくお願いいたします。

事務局からは以上でございます。

◎委員長（豊口　協）

それでは、特にご意見がなければこれで終わりたいと思いますが、事務局長、いかがですか。何か。よろしいですか。

「ありません」という声あり

◎委員長（豊口　協）

助役ありましたら。

◎副委員長（二澤和夫）

それでは、大変またお忙しい中お集まりをいただくわけでございまして、この会議もなかなか胸突き八丁というふうな場面に入ってくるわけでございますが、ひとつよろしくお願いをいたしたいというふうに思います。

今日は、どうもありがとうございました。

午後８時２０分終了